

人から人へ

かつら せいいちろう
桂 誠一郎

(理工学部システムデザイン工学科教授)

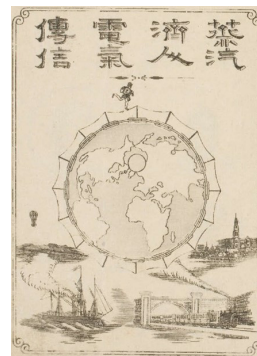
皆様ご存知のように、福澤諭吉先生は幕末から明治初期の時代を生きられ、我が国の近代化を先導されました。激動の時代においては、「独立自尊」の精神、すなわち「自分の頭で考える」ことが必要であると説かれています。現代において、我が国は「超成熟社会」に突入し、総人口・労働力の減少、急速な少子高齢化の進展、地方の過疎化による国内の不均衡の拡大、低成長経済の定着など、前例のない諸課題への解決が必要な時代となっています。また、気候変動、エネルギーの安定供給、感染症や災害への対策、国家間の争いなど、課題の複雑化、グローバル化も進んでいます。

このような不透明で混沌とした時代においては、次世代の基盤となる新たな学問の創生に加えて、次世代を生きる人材の育成が一層重要となることは言うまでもありません。私が本学で教育・研究に携わっているのは上記の理由からです。研究室の学生達との日々のディスカッションはまさに「半学半教」で、お互いに単独で研究を行ったのでは決して起きないような化学反応により、新たな発想につながった瞬間が多々ありました。

日本学術振興会との共催で「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」を実施してきたのも同じ想いからです。コロナ禍でも継続し、2023年で連続12年の実施となります。全国から小学5・6年生、中学生、高校生が参加し、受講生は累計で300名を超えました。プログラムにおいてキャンパスツアーを企画し、毎年理工学メディアセンター（松下記念図書館）には見学にご対応頂いています。蔵書数が36万冊を超えていること、そのほとんどが理工学分野の専門書であること、雑誌と呼ばれるものが実は論文集であることなど、受講生達が驚くポイントが多くあります。新たな知を創造し、人類共通の財産として積み上げていく「研究」と、普段行っている「勉強」の違いを学んでもらう良い機会となっております。感謝しています。

またプログラムにおいては、私の専門分野であるロボット制御に関する実習の後、「夢のある未来のロボット社会」をテーマにグループディスカッション&発表会を行っています。多様でユニークな意見が出され、質疑応答をする中で、自身の考えがより深まる体験をもらっています。まさに福澤先生の「人間交際（じんかんこうさい）」の実践が、新たな解をもたらすために必要であると感じます。

福澤先生が1866年に書かれた『西洋事情』の中にとっても印象的な挿絵があります。それは地球を一周する電信柱の上に電線が張られていて、その上を飛脚が走るという絵です。



(慶應義塾福澤研究センター画像提供)

今から150年以上前に、手紙が電気信号で送られるようになると、当時の日本人に分かりやすく伝えていきます。現代では、この予言通りに高速、広帯域な無線ネットワークがインフラとなっています。未来では、さらにロボットまでもがネットワークにつながり、五感を飛ばすことで、世界のどこにいても分身のように瞬時に移動して、物理的に行動することも可能になるかもしれません。

10年後、20年後の未来すらどうなるのかを予想するのはなかなか難しいことですが、未来の担い手である学生達、若手人材にぜひ100年後、200年後の夢溢れる未来社会をデザインしてもらいたいと願っています。